

なでしこ調査士誕生！？

本稿は、富山県土地家屋調査士会会報「らんどまーく 1月号[2012年度]」に掲載されたものを転載させていただきます。



子供のころは、目に入るすべての物が、新鮮な輝きと驚きに満ちていたのかもしれない、そう感じさせてくれる出来事がありました。

平成23年8月10日、夏休みの自由研究の取材をしたいからと、小さな小学2年生の女の子と付き合いでそのお父さん、お祖父さんが調査士会館へ来館されました。

女の子はある日の下校途中、道路の隅に、赤い笠を被った金属の釘が埋まっている事に気がきました。帰路の友に指折り数えたその釘は41個にも上ったそうです。

赤や黄や緑や金色の物。その笠の種類の多さも相まって、女の子の目には珠玉のように映っていたのかもしれませんが、その釘が、筆界点、トラバ一点、街区基準点を設置した金属釘である事を文脈から、土地家屋調査士の皆さんはもうお気づきだと思います。

金属釘と同時にみつけた金属のプレートには、「富山県土地家屋調査士会」と印字されている。なにか手がかかりになるに違いないと、お父さんの力を借りて当会へと辿りついたそうです。

私たちは、以下のような質問を受けました。

・どういう目的をもった物なのか ・色の違いは？ ・いつごろからあるものなのか ・どのようにして埋めているのか。

メモを取りながら、徐々に疑問が氷解していく様子、時折見せるはにかんだ笑顔は我々が用意した教科書通りの回答とは不釣り合いなほど輝いて見えました。

こんな小さな女の子が我々の設置した境界標に興味を持ち、疑問をぶつけてくれた事、娘の抱いたその疑問に何とか答えてあげようと努力するお父さんの直向きな姿に、私たちは心の角が取れていくかのような感覚を覚えました。

また、同時に境界標を設置することの責任の重さを痛感し、未来に誇れる仕事を残すための研鑽を怠ってはならないと深く決意した一日となりました。

写真には納められませんが、学校から自宅までの帰途に見つけた境界標はデジカメで撮影し、ファイルに。さながら「調査報告書」の様です。

松下幸之助はこう言ったそうです。「学ぶ心さえあれば、万物すべてこれ我が師」。

小さな女の子の姿に経営の神様の言葉を重ねてしまいました。

広報担当理事 高倉 健

後日譚

先日、とても喜ばしいニュースが舞い込んできました。

なんと、この自由研究の作品が第29回全国小中学生作品コンクール生活科部門において文部科学大臣奨励賞に輝きました。

